

明日香をさぐる

牽牛子塚西側園路完成

今回は牽牛子塚古墳の西側に完成した、園路等について紹介したいと思います。

牽牛子塚古墳は大正12年3月7日に内務省により墳丘の一部が国史跡に指定されました。その後、昭和53年の環境整備事業や平成21年度からの範囲確認調査で対辺長約22mの八角墳であることが明らかとなり、隣接して越塚御門古墳が発見されるなど、古墳の当初の範囲が史跡地外にまで広がっていることがわかってきました。さらに平成28年の調査では墳丘の東側谷部で大規模な整地が行われていたことから、飛鳥時代の終末期古墳は築造当初、広範囲に工事が及んでいた可能性がでてきました。

平安時代に著わされた『延喜式』には斉明天皇の越智岡上陵の兆域

は五町四方と記されています。兆域とは古墳の祭祀や維持を司る上で必要な施設が存在していた範囲で、齊明陵の場合、約9万坪をほこります。明日香村内では他に欽明天皇の檜隈坂合陵では約6万坪、天武・持統天皇の檜隈大内陵は約7万坪、文武天皇の檜隈安古岡上陵は約3万坪といずれも広範囲であったことがわかります。

飛鳥時代、中国大陸からもたらされた墓地の選定に風水思想の影響があったと考えられています。風水思想では「東に流水、南に沢、西に大道、北に主山の父母山が、中央に龍穴（古墳）」があり、これらを満たした場所が墓地をつくる

上で四神相応の地とされています。終末期古墳では厳密な意味での四神相応の地ではありませんが丘陵や谷部を利用した四神相応の地と見立てて古墳造りが行われました。牽牛子塚古墳も東に高取川（流水）、南に大きな谷（沢畦）、北に尾根（高山）を兼ね備えた四神相応の地となっています。風水でいう龍穴部分を中心とした約1.2haの範囲は史跡牽牛子塚古墳・越塚御門古墳として令和4年春に史跡整備事業が完了しています。さらに牽牛子塚古墳の周辺には風水でいう「山脈」を示す青龍砂と白虎砂が墳丘を抱くように左右の尾根として広がっています。

今回、西側の尾根（白虎砂）の一部約1,300㎡について園路やサイン等の整備を行いました。整備では築造当時の景観に近づけるように地形の改変は行わず、芝張りや植栽を行いました。さらに園路の整備や西飛鳥の文化遺産への周遊ルートを示した案内板や古墳などを紹介した解説板、休憩スペースとして日よけ棚や木製ベンチなどを設置して、来訪者の利便性を高めています。皆さまお越しの際はぜひ、ご利用ください。

（明日香村教育委員会文化財課）



▲西側園路から牽牛子塚古墳を望む



▲牽牛子塚古墳から休憩スペースを望む